群れを率いている彼女の背中を見ながら、押し倒してやりたいと思った。
常道を外れた一瞬の情動は、直後に理性が努力もなく押さえ込む。あまりにも短すぎた情動は他人が気づく余裕を持たず、表情にも出なかったので世界はなにも変わらなかった。
悪い兆候だ、と喜屋武汀は判断する。
あの夏。己は神に近しい毒に触れて倒れた。その毒は完全に抜かれて体調はすぐに戻ったが、おかげで、別の毒を見落としていた。
人の毒はいまだ己の中を巡っている。
視線に気づいたのか、梢子がこちらを振り返った。少し前に竹刀を合わせた際の気迫はどこにもない。友人へ向ける柔らかな表情だ。その表情に、汀の中にある毒が濃度を増した。一年かけて希薄にした濃度があっという間に元通りだ。無駄になった一年を思って汀は軽く失望した。
制服姿の梢子が近づいてくる。出会った頃は警戒心を剥き出していたが、今となっては懐かしい。視線に棘はなく、親しげで、柔和だった。
そして、それ以上でも以下でもない。
「まったく、いくら素地があるっていっても、本当に決勝まで来るなんてね」
半ば呆れ、半ば感心した風情で梢子が笑う。「当たり前でしょ？」にやり笑って答えると、彼女は「まあね」と当然のように応答した。
「汀はもう向こうに戻るの？」
「や、こっからは個人行動。他の子たちは帰るけど、せっかく来たんだから遊びたいし」
「またそうやって勝手なことをするんだから」
そうは言われても、最低限の礼儀は通している。学校側にも許可をもらっているし、これから帰るまでの諸経費は自費なのだ。まあ学生なので本当に自分の懐から出すというわけでもないけれど。
気温と湿度が高いせいでやけに蒸し暑い。
まだ空は青いが、夜には雨が来るかもしれない。
梢子の首筋を汗が伝っている。
あれは毒の象徴だ、汀が目を逸らす。
「ああ、どうせだからオサたちの街にでも行ってみようかな。オサ、遊んでよ」
「なによ、このへんにホテルとか取ってないの？」
「別に、キャンセルすればいいだけだし。ねえオサー、遊んで遊んでー」
「ちょっ、こらっ、暑いんだからくっつかないで！」

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

嫌がらせを交えて抱きつくと、梢子が力いっぱい押しのけてきた。確かに暑い。気温に加えて体温まで伝わるものだから相当な暑さだ。

けれど彼女が嫌がるのが面白いので、汀はしばらくその身体を押さえ込んでいた。

「暑いってば！」梢子の手が頭を殴ってきた。「うわ、暴力反対」わりと痛かった。

暑すぎて溶けそうだ。

「もう、判ったからっ。いい加減はなれなさい！」

言質が取れた。よしよし、と頷いて梢子から離れる。くっついたうえに暴れたから、二人とも汗だくになっていた。なかなか身を削る嫌がらせだ。しかし後悔はない。

不意に粘着質な視線を感じて、汀はそちらへ眼を向ける。

予想していたことだが、視線の主は保美だった。その視線のおかげで毒が薄まる。

彼女の存在はありがたい。彼女はいつも、こちらの立ち位置を再確認させてくれる。

世界における己の役割を、思い知らせてくれる。

「なによやすみん。あんたもミギーさんとくっつきたいの？しょうがないなー」

「え、え？」

擬音にしたら『うへへ』とかそんな感じになりそうな笑顔で保美へ腕を伸ばすと、「ちょあー！」百子が横から割り込んできた。

「やめてくださいよミギーさん。ざわっちただでさえ暑さでＨＰ削られてるんですから、これ以上暑くなったら倒れちゃいますよ」

「っと、そっか」

両手を広げて保美の前に立ちはだかる百子に、汀は白々しく答えて腕を引っ込める。

百子の心配は嘘ではないのだろうけど、それ以外にも汀の邪魔をする理由があると知っている。

けれど汀はそれに触れないでいた。藪をつついて出るのが蛇ならまだ良いが、鬼が出てくる可能性もあったからである。鬼が出るか蛇が出るか、などとリスクの高すぎる冗談を続ける楽天性は持っていない。

「保美、悪いけどタオル出してくれる？」

「あ、はい」

唯一の被害者となってしまった梢子が、うんざりした顔で保美からタオルを受け取る。おざなりに顔と首を拭いてタオルを返したが、保美は少しだけ迷ってから腕を伸ばして、梢子が拭いきれなかった汗に、戻されたタオルを当てた。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

それを梢子は甘受する。
「ありがと」
「いえ……」
保美はなんだか嬉しそうだ。
短い会話に垣間見えるパーソナルスペースの消失、それに気づかない二人。
百子と並んでその光景を眺めていた汀は、己より随分下にある顔を盗み見る。彼女の双眸にはフィルタがかかっていた。サングラスと同じ役割を果たすフィルタだった。眩しいものから自分を守るためと、自分が発するものを外部から隠すためのものだ。
手のひらを小さな彼女の頭に置いて、ぐしゃぐしゃと撫でる。「おお!?　いきなり何をしますかミギーさん！」油断していたのか、頭上からだったので気づかなかったのか、百子が突然の衝撃に軽く仰け反った。
ぐしゃりぐしゃり、汀は乱暴に百子の頭を撫でながら、ふんと鼻から息を洩らした。
「あんたも大変よね、百ちー」
「何がです？」
「やすみんの保護者ごっこ」
「……そりゃ、ざわっちはうちの大事な娘ですから」
ちょっとだけ口を尖らせて百子は答える。こちらの発言の真意に気づいているのか、それとも言葉そのままに受け取ったのかは判らない。けれど気づいた可能性は高いと汀は見ていた。小さい彼女は馬鹿っぽいが聡い。
百子は時々、自分は保美の父親的役割（ロール）なのだと言う。
嘘だと汀は知っている。他の誰かも知っているのかもしれない。
己の想いをごまかして、父性だと不正に主張して。
彼女は聡いが、馬鹿だと思う。
煩わしくなったのか、頭に置かれたままの手を百子が外させる。乱れた髪を手櫛で直していると、気づいた保美が手伝い始めた。
「うう、ありがとざわっち」
「百ちゃん、髪質固めだからブラシ使わなくても大丈夫だね。わたしなんかすぐに絡まっちゃって」
「いや！　ざわっちはそのふわふわな髪が良いのですよ。こう、女の子ーって感じで可愛いじゃぁないですか」
「あはは……ありがと」
親友たちのやり取りはなごやか。良い距離感だ。百子にしても、その距離感自体に不満はないのだろう。だからこその隠し事。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

彼女は馬鹿っぽくて聡くて、強い。
「あ、ミギーさん。そちらの学校の皆さん、もう帰るみたいですけど」
離れた位置にいる、汀と同じ制服姿の集団が移動を始めたのを見止めて、百子がそちらを指差す。
汀はそれに、パタパタと手を振った。
「ああ、いいのいいの。あたしはもうしばらくこっちにいるから」
「お、何か用事でもあるんですか？」
「単なる物見遊山。こんなにゆっくりできること、滅多にないしせっかくだから」
「なるほど、忙しいお人なんですねミギーさんは」
「まあね」
どうして忙しいのか、知ってるはずもない百子はきっと、バイトとか部活動のことだと思っているだろう。間違っても鬼と戦っているなどとは思わない。
そう思っている……知っている一人は、複雑そうな表情で汀を見ていた。
「汀、あなた将棋か囲碁はできる？」
「へ？　一応、打てることは打てるけど」
梢子の質問の意図が判らず、汀は首をかしげる。
「じゃあこっちにいる間はうちに泊まったら？」
「……え？」
思いがけない提案だった。というか、質問と提案のつながりが読めない。囲碁と将棋を打てることが小山内邸にお邪魔する資格なのか。
答えあぐねている汀に、梢子は「ちょっとそこのハックでお茶でも」くらいの気安さで、
「ホテルで一人退屈してるよりいいでしょう。今、うちの両親は仕事が忙しくてほとんど帰ってこないし、おじいちゃんは囲碁と将棋の相手が私しかいないからつまらないって言うし」
そんなふうに誘いをかけてきた。
何度も対戦していれば、お互いに相手の手の内が読めてくる。
先を読むのが盤上の攻防の醍醐味だが、先が読めすぎてはつまらない。だから新しい相手ができれば、祖父の消閑になるのではないか、という思惑のようだ。
このおじいちゃんっ子め、と汀は軽く苦々しい思いをいだく。その提案、こちらの都合は考えていないではないか。いや、梢子にしてみれば汀にも利があるだろうと思ってのことだろうが。ホテル代とか退屈な時間とか。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

しかし……こんなところでそんな思いつきを口にしなくても。
なんというか、ここには地雷があるのだ。そしてその地雷を踏めるのは梢子だけで、地雷があると知らないのも梢子だけだった。そして彼女は地雷を踏んだ。
彼女だけが気づかない地雷が、踏まれてしまった。
「いやいやいやミギーさんも人のお宅では気疲れもするでしょうし！
あ、なんならうちの寮に来ますか、確か空き部屋があったはずですからなんとかなると思うんですよ！」
果敢にも、百子がスイッチの入った地雷を抱えて走り出した。なんという勇気。そして無謀。ありがとう百子、君の雄姿は忘れない。
しかしその代替案、地雷と同じ屋根の下にいろと言っているのだが。
「いや……うん、えーとちょっと待って」
痛む眉間を指先で押さえながら、逆の手のひらを梢子へ向けてかざす。
どう考えても断るべきだ。世界における立ち位置も、今この状況も、梢子の案は却下すべきと全員一致で結論を出している。
理由を見つけなければならない。梢子の誘いを断る理由。
実のところ悪魔の証明なのだがそんなものはイカサマでなんとかなるはずだ。
らしくもなく動揺してしまって、汀の思考回路はうまく回らない。
「別に……いいんじゃないですか？」
驚いたことにそんな発言をしたのは地雷だった。
百子の決死の努力は無駄に終わっていたらしく、地雷はとっくに爆発していて、荒涼とした風景はずいぶんと痛ましかった。
「や、ざわっち、あのね……？」
何を言うか決めないまま百子が口を開いた。彼女の立ち位置では、そうするしかあるまい。止めなければ、という使命感のみが先走ってしまっていて、けれど解決策はどこにもないのだ。
荒涼とした表情のまま、保美は背の高い汀を見上げた。彼女の顔は悟りを開いたかのごとき無。なるほど、煩悩は深くなりすぎると無に近づくのか。
汀は鬼を相手にするのが専門だ。悟りを開いた仏には太刀打ちできない。
心持ち身を引きながら、両手を胸の前にかざした。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

「やすみん、一応言っておくけど、なにもないから」
「そうですね、なにもないですよね。咲森寺でなにかあったような気がしますけど、わたしの記憶違いですよね」
うわあ一年も前の話を蒸し返された。
「ないない。やだなーやすみんってば」
「じゃあ、いいんじゃないですか？」
汀は夏の暑い日ざしを感じ取れなくなっている。ううむ、普段大人しい子が怒ると怖いというのは本当なのだな、とどこかに残った冷静な部分が感心していた。
会話の表面だけを見ていた梢子は、小さく首をかしげている。
「よく判らないけれど、うちに来るってことでいいの？」
彼女の暢気さがとことん恨めしかった。

梢子の家に厄介になるのをためらったのは、別に保美への後ろめたさからだけではない。
正直に言ってしまえば、そんな後ろめたさなど小指の先ほどしかないのである。
理由は右目にあった。それから左胸に。

しかし衆人環視の前でその理由を伝えるわけにもいかず、結局ずるずる引きずられてついてきてしまった。どうも彼女が絡むと面倒くさい流れに巻き込まれる。
「どうぞ」
「……お邪魔します」
嫌々ながら、という気配を隠しもしないで汀は小山内家の玄関を上がる。
音に気づいたか小柄な老人が顔を出してきた。話に聞いていた梢子の祖父だろう。名は……仁之介といったか。
「おう、帰ったか」
「ただいま。この子、さっき電話で言った汀」
仁之介が視線をこちらに向けてきた。値踏みというほど不躾ではないが、探るような目つきだった。
「まあゆっくりしていけ」
「はぁ」汀が礼儀で軽く会釈をする。仁之介は難しい顔のまま、ふんと小さく鼻を鳴らして引っ込んだ。気に障ったかどうなのか微妙な反応だ。
「気にしないで。おじいちゃん、誰にでもああだから」
汀の顔色を読んだ梢子がそうフォローしてくる。汀としては嫌われても別段困らないのだが、まあ、無駄に悪印象を与えることもない。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

「肩でも揉んだらいいのかしらね」「それより囲碁の相手してあげて」梢子は小さく笑って碁石を打つ真似をした。居間に通されると、そこには仁之介が主然と座って新聞を読んでいた。目だけを上げてすぐに戻す。「茶」おそらくは梢子に告げたのだろうが短すぎて聞き逃しそうな要求だ。梢子は慣れているのか、「はい」とこれまた最短の返事をした。

「汀、適当に座ってて。今お茶持ってくるから」

「ああ、うん、や、お構いなく」

「今さらそんな他人行儀にしなくていいわよ」

梢子のまなじりが下がって、その艶然とした面差しがなんだか新鮮に感じられる汀だった。

――――まずいなぁ。

そっと己の額を指先で押さえる。悪い兆候。悪寒と言ってもよい。

まるで自分が人ではないものになった気分だ。

人と鬼の境界。その根本的な違い。

人に仇なす人ではないもの。

圧倒的に暴力的な、それを抑える術を持たない、絶対的で本能的な欲求。

それを振るうのはもう人ではない。

文字通り、人でなしだ。

まだ我慢はできているが、これ以上毒にあてられたら、どうなるか判らない。

「おい、いつまでもボケッと突っ立ってないで、座ったらどうだ」

その場を動かない汀が目障りなのか、それとも具合が悪そうに見えたのか、仁之介は先ほどと同じように目だけをこちらに向けて言ってきた。

「あ、はい」奇妙な威圧感に圧されながら汀は仁之介の向かいに腰を下ろす。

新聞を持ったままジロジロと遠慮なく見てくる古賢のまなざしに、汀は居心地の悪さを感じる。

「軍師策士ってほどじゃねえが、小細工が好きそうな顔してるな」

「そうですかね。別にそんなことありませんけど」

飄々と嘘をつく汀だった。

それに気づいたか、仁之介がごくかすかに口元を歪める。笑ったのだろうが、妙にこう、親しみのない表情だった。

「碁の相手しろ。梢子は結局、根っこが剣士だから手がまっすぐすぎてつまらねえ。

どこまで行っても夏夜の真似をしやがるから、いつまで経っても成長しやがらねえんだ、あいつは」

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

不意に出た名前。汀は表情を変えない。
懐かしい名だ。剣士……己が刃を合わせた時は、もう剣鬼だったが、まっすぐさはきっと変わっていなかったのだろう。
ぐるり視線をめぐらす。賞状やトロフィが飾られていた。梢子の名前が書かれたものと、別の名前が書かれたものが混在している。
この家は囚われている。
悪くはない。思い出を大事にする、その心意気を否定するつもりはない。
ただ……自分がここに身を置いてしまえば、話は別だ。
汀は己の右目をそっと撫でた。

ひとしきり仁之介と碁を打って（勝敗は五分五分。「小ずるい手を使ってくるな。悪くねえ」というお言葉をいただいた）、夕食後は梢子の部屋に招かれて身体を伸ばしていた。
床へじかに寝転がっている。もう何度も遊びに来たことがあるような図々しさだ。遠慮するなと言ったのは彼女の方なので、汀は本当に遠慮しない。
「おじいちゃん、汀を気に入ったみたい」
背中を向けているし、独り言のような口調だったが、汀は「ふぅん」とそれに答えた。
「あんなふうだから怖がられることも多いんだけれど、あなたは物怖じしないからそれが良かったのかしらね」
「単に碁が打てたからじゃないの？　それかあたしの胸に悩殺されたか」
「うん二つ目は絶対にないから」
判らないではないか。齢を重ねても男は男。まだまだそういった方面に関しては不都合がないくらいのかくしゃくぶりだったから、表に出さなかっただけで内心では大喜びだったかもしれない。
などということを言ったら彼女は本気で怒りそうなので汀は黙った。
少し前から、窓の外では連続的な音が流れている。昼間予想した通り、夕暮れを過ぎたころに雨が降り出して、その勢いは時間が経つごとに強まっていた。暴雨とまではいかないものの、傘を差さずに出たら五分でずぶ濡れになるくらいの強さはあった。
その音を生み出しているのは雨、水だ。人の身体の七割をつかさどる成分。
身体の外側にある水は怖い。溺れてしまうから。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

梢子が近づいてきて、真横に立ち止まる。
見上げた先には呆れ顔があった。
「汀、いくらなんでもだらしなさすぎ。正座しろとは言わないけれど、せめて身体は起こしなさいよ」
「うーん、雨降ってるし、暑くて力が入らない。ほら、あたし猫っぽいから」
言葉どおり、汀の格好は暑さでだれる猫に似ている。
「猫っぽくてもあなたは人間じゃないの。ほら、起きなさい」
呆れた声と共に、両手をつかまれて上方へ引っ張り上げられた。
ぐでんと意識的に力を抜いていたので、梢子は少しばかり苦労しながら汀の身体を起こした。
「まったく、子どもみたいなことしないの。ナミだってそんな幼稚な真似しなかったわよ？」
「うう、だるい……。オサの頭文字Ｓ－」
「別にいじめてないわよ。心頭滅却すればっていうでしょう」
ああ、本当に滅却してしまいたい。
心と頭。
欲求と、右目。
それらを消し去ってしまえば、おそらくは平穏を得られるのだろう。
体内にうずまく毒素がめぐる速度を上げる。
梢子はまだ汀の両手をつかんでいる。
「……オサ」
「なに？」
暑くて溶けそうだ。
「アイスが食べたい」
梢子が思い切り眉をゆがめた。
「……勝手に買ってきなさい」
「あ、駄洒落？　面白くないけど」
「違うわよ」
本当に気づいていなかったらしく、梢子はわずかに顔を赤らめた。
「こういう暑い日には、やっぱりアイスだと思うのよね。遠く徳川の時代には氷っていうのはそりゃぁ高級品で、富士の山麓から牛車一杯の氷を切り出して何ヶ月もかけて運んだんだけど、殿様に届けられるころには溶けてほんの数口分しか残っていなかったそうよ。
それが今じゃ、歩いて数分のコンビニに行けば簡単に買えるんだから、便利な時代になったものよねー」
「……簡単に買えるんだから買ってこいと」
こちらの意図を正確に察してくれた梢子が溜め息をついた。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

「なら、あなたも一緒に来なさい」ぐいと手を引かれる。自分で行くのが面倒だから、梢子に押し付けようとしていたのに、それでは意味がない。
しかし、これ以上ごねたところで、厳しい彼女は要求を呑んではくれないだろう。
「しょうがないなー」
よいしょ、と腰を上げる。水は苦手なのに。雨で溺れるとは思っていないけれど。
外はざんざん降りで、傘を差して数分歩くだけといっても、まったく濡れずに往復するのは無理と思われた。「うー、濡れるー」「あなたが我侭言ったせいじゃないの」愚痴をこぼす汀の額を梢子が軽く小突いた。
雨の日の宵は暗い。当然ながら月明かりは皆無、人通りもほとんどなかった。
雨の音が世界と二人を隔絶している。
隔絶した世界に、一瞬風が吹いた。汀の身体に違和感が生じる。
ほんのわずかな時間だったけれど世界が暗く揺れた。
「……え？」
梢子の呟きには驚きが含まれていた。ほぼそれのみと言っても良かったが、微かな疑念と、希望が垣間見える呟きだった。
「オサ？」
「今の……」
梢子が来た道を振り返る。汀もそれを追う。なにもない。ただただ、道があるだけだ。
前にも後にも、二人のほかに世界を構成するものはなかったはずだ。
けれど梢子はいっぱいに目を見開いてなにかを見ていた。汀には見えないなにか。
汀は大急ぎで右目を拓く。
「夏ちゃん！」
「オサ！」
遅かった。汀が梢子からのびる糸を視認した時にはもう、彼女は駆け出していた。
傘を放り出して逆方向へ走る梢子を、汀が同じように追いかける。
――――『つけられた』！！
己のしくじりに歯軋りしながら汀は梢子を追う。
囚われている彼女。それは隙があるということだ。鬼がつけいるその隙は、おそらく汀がいなければ閉じていたはずのものだった。
汀は鬼を視る。隠れている鬼を見つけてしまう。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

見つかった鬼は隠れない。
苛立ちに、右のまぶたを爪で引っかいた。
先ほどの風は鬼が通り過ぎた気配だ。汀には何も見えないが、おそらく梢子は剣鬼の影を見ている。違う鬼が見せる幻想に惑わされている。
「行くな、オサ！　そっちにはなにもない！」
君の望む人はもういない。
そこに希望はない。
梢子は振り向きもしない。
雨で濡れた衣服が身体にまとわりついてくる。呼吸がしにくい。溺れそうだ。
汀はもがきながら梢子を追いかける。二人の距離は次第に縮まっていく。地力はこちらが勝っている。手を伸ばす。あと二歩。一歩。
つかんだ。
力任せに引き寄せて抱きとめる。梢子は汀を見ない。幻を追いかけたがる。
鬼の影を追いかけて、再会を夢見ている。
「夏ちゃん！　夏ちゃん！！」
「違う、剣鬼は……鳴海夏夜はもういない！」
「いるもの！　あそこに夏姉さんがいるもの！」
「こんな時まで頑固者なんだから……！」
汀の腕から逃れようともがく梢子を、汀はますます強く拘束した。
「落ち着けオサ！　ここにはあたししかいない！」
「だって、夏姉さんが……」
彼女に関わるとろくなことがない。
鬼と深くつながりすぎる彼女はある意味、己の天敵だ。
人では止められないか？
鬼を渇望する彼女は、人の身ではどうにもできないか？
ならば。
鬼となろう。
人でなしになってしまおう。
平穏もなく、安寧もなく、秀麗ではなく、清浄ではなく、なめらかさもなく、輝きもなく。
そんな、本能が求めていた世界に、身を投じてしまおう。
「オサ！」
抱きしめたまま顎をつかんで、無理やりこちらを向かせる。
それでも梢子は鬼を探す。
鬼ならここにいるだろう。
「あたしを見ろ!!」
唇を彼女のそれに重ねる。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

奪う、という表現がこれ以上ないほど似合うキスだった。
剣鬼から、汀は梢子を奪いにかかった。
「……っ」
梢子が瞠目する。反射的に離れようとする身体を、汀は力ずくで押さえ込む。
重ね合わせた唇の隙間から雨が流れ込んでくる。呼吸がしにくい。雨に溺れる。体内をめぐりめぐる毒素が汀を変容させていく。
こうあってはならないと、こうなってはならないと、汀は一年かけて迂回して、一年後に後悔した。
そこには恋も愛もなく、ただ、ただ、本能的な感情未満の接触欲求だけがあった。
一瞬だけ離れてまたすぐに口づける。少しずつ梢子の身体から力が抜けていく。
彼女は鬼に魅せられて、鬼に焦がれる。
そのまま、どれほどの時間が経ったろうか。
首筋に彼女の腕が絡んだ。雨にまみれた身体は灼けるように熱い。
熱すぎて溶けそうだ。溶けてしまいたい。
触れた唇を伝う水だけが二人の境界を明確にしている。
雨が世界と二人を隔絶している。内側には静寂しかない。
甘い、甘い静寂。梢子は汀を見ている。
奪った。
理性もなく、知性もなく、遠慮もなく、配慮もなく、人格もなく、品格もなく。
本能的で暴力的な強奪だった。
髪を額を頬を首筋を肩を腕を胸を腹を下腹を脚を、水の膜が覆っている。
水滴の一筋一筋をなぞるように、人でなしの指先が、鬼を想い患う身体を這う。触れる指にも触れられる肌にも悦楽はなかったが、切なくはあった。
二人の間に降りしきる雨がフィルタをかける。
離れた唇が呼吸して、相手の首と腰にまわした腕が、呼応するように力を弱める。
「落ち着いた？」
「……ん」
「あんたの夏姉さんは、もう、この世界のどこにもいない」
「知ってた……。知ってた、けど」
それでも追いかけずにはいられない執着。それは愛情と言って差し支えない。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

目の前の美しい愛情を、汀は暴力でねじ伏せた。
こめかみに吐息で触れる。深度の浅い接触はたやすく受け入れられて、唇から舌先へと深度は進行していく。夏の雨は甘かった。毒された身体がさらに熱を帯びる。
こめかみから伝って耳朶へ到達した時、彼女は小さな嬌声を洩らした。
「みぎわ。だめ」
切れ切れに、ようやくそれだけをの言葉を紡いだ梢子が、弱々しく汀を押しのけようとする。
駄目は八方を取り囲まれて打つ手がないという意味だ。ねじ伏せられた彼女は暴力に屈してよるべなき手をさまよわせる。
やはり、こうなってしまうのか。
鬼と成れば、人は抗えないのか。
もう二度と、平穏でなめらかな世界には、戻れない。
彼女の背中に両腕をまわして、その肩に額を置く。抱きしめると言えるほど強くなく、どちらかといえば縋りつくような弱々しさで。
「――――オサに会いたくなかった」
ずぶ濡れの猫はすっかりしぼんで、その声も心なしか沈んでいる。首筋に絡んだ熱は変わらない。
梢子に会いたくなかった。出逢わずに他人のままでいたかった。
はじめから彼女と接点を持たなければ、己の欠点を見出すこともなく、平穏無事に正しい世界で生きていられた。
けれど、もう触れてしまったから戻れない。欲求は正直で限界知らず。二人の周囲は絶対的に間違って、元には戻せない。
世界はいびつに閉じられて正解は秘密。
そういう、人でなしと害悪が待ち望んでいた、不正解な封世界。
小さな溜め息が聞こえた。呆れたのかもしれない。梢子の手が汀の顔を上げさせる。彼女の視線は雨に流されることなく、いつも通りの強さと優しさをしていた。
「私は……汀に会いたかった」
「嘘」
「無自覚と嘘は違うでしょう」
互いの視線が絡んでいる。それは純粋で性的な交わりだった。
視線は組木細工のように複雑に絡む。あるべき突起があるべき窪みに嵌るように、性的な絡みつきを成している。
だから、汀は動けない。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

ふと、梢子の視線がかすかに移動する。呪縛が解けた汀は雨の中で肩の力を抜く。
「汀……目」
「ん？」
絡めていた腕を解いて、梢子が汀の右まぶたをたどった。苛立ち紛れに自分で引っかいた箇所が傷ついていたようだ。雨の刺激でごまかされているせいか、痛みはまったくない。だから気づかなかった。
「じっとしてて」
梢子は自分より高い位置にある汀の頭を引き寄せると、その傷口に舌先を当てた。
ずいぶんと濃度の高い毒素がそそぎこまれて、身体の中心線がぞくりと震える。
こもった熱の吐息がまぶたに触れる。柔らかく、しめった感触がゆっくりと自身を這い回っている。溺れそうで、汀は息を止めた。
彼女もまた、本能的で暴力的だ。
「帰って、ちゃんと消毒しないとね」
「や……このままでいい。大丈夫」
この毒を、消してしまいたくない。
もういいだろう。もう、いいのだろう。
毒食らわば――――性(さが)まで。
雨脚が弱まってきた。それでも小雨というにはまだまだ遠く、汀は額にはりついた前髪をかき上げながら真っ暗な空を見上げる。
暗い空は、大人しく病弱な彼女の視線を思い出させる。
けれどもう、世界はゆがんで、人としての立ち位置を失った汀には、なんの意味も持たなくなっていた。
ああ、彼女に嘘をついてしまったことになるのかもしれない。
「こんなずぶ濡れじゃ、買い物はもう無理ね」
「アイスはもういいの？」
「ん。他に食べたいものができたし」
「え？」
きょとんとした視線。汀は微笑する。
人から人でなしとなった汀に生まれた新たな欲求。
接触欲求から、摂食欲求へ。
素直に要求しても聞き入れてはくれないだろうから、とりあえず、今夜彼女を押し倒すことにする。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.